

Course number		U-LAS53 10001 LJ31						
Course title (and course title in English)	自然と文化 - 農の営みを軸に - Nature and Culture : Perspectives from Agriculture			Instructor's name, job title, and department of affiliation		Graduate School of Asian and African Area Studies Professor,TAKEDA SHINYA		
						Graduate School of Asian and African Area Studies Professor,FURUSAWA TAKURO Graduate School of Asian and African Area Studies Associate Professor,KOSAKA YASUYUKI Center for Southeast Asian Studies Associate Professor,YANAGISAWA MASAYUKI		
Group	Career Development			Field(Classification)		Community Collaboration		
Language of instruction	Japanese			Old group	Group B		Number of credits	2
Number of weekly time blocks	1	Class style	Lecture (Face-to-face course)			Year/semesters	2024・First semester	
Days and periods	Wed.2		Target year	All students		Eligible students	For all majors	
[Overview and purpose of the course]								
農林業は、生物生産を通じた技術的体系あるいは経済的営為であるだけでなく、自然と深く関わってきた歴史の所産としての文化という側面をもっている。また、農林業は、その営みを通じて地域の環境形成やその維持にも大きな役割を果たしてきた。国内外での多様なフィールドワークにもとづいて、地域の環境や文化の形成・維持に果たしてきた農林業の役割を明らかにしつつ、「農」の営みがもつ現代的な意義と意味を問いかける。								
[Course objectives]								
地域の環境や文化の形成・維持に果たしてきた農林業の役割を考察できるようになる。								
[Course schedule and contents)]								
各教員が複数回の講義を担当する。それぞれのフィールドワークを基礎に以下の課題についてリレー講義を行う。								
第一部 生存を支える農の営み								
1)イントロダクション(竹田晋也)								
農林業は、生物生産を通じた技術的体系あるいは経済的営為であるだけでなく、自然と深く関わってきた歴史の所産としての文化という側面をもっています。また、農林業は、その営みを通じて地域の環境形成やその維持にも大きな役割を果たしてきました。本講義では、国内外での多様なフィールドワークにもとづいて、地域の環境や文化の形成・維持に果たしてきた農林業の役割を明らかにしつつ、「農」の営みがもつ現代的な意義と意味を問いかけていきます。まずはこの教室から「自然と文化」を考えることから始めてみましょう。								
2)食と自然への生物学的適応(古澤拓郎)								
人類は、アフリカに誕生してから今日にいたるまで世界各地に広がり、さまざまな環境に適応する形で進化してきました。その適応の重要な点は、生命を持続するために食を得て、農を営むことです。人類が自然の何をどのようにして食にしてきたか、また食を栄養にするためにどのような身体・生理機能を獲得してきたかを軸に、人類の生物学的適応と文化的適応について概観します。								
3)農の基盤としての地球(柳澤雅之)								
農の営みは、人間が自然のシステムをうまく利用することで成り立っています。具体的には、物質やエネルギーの循環、生き物の繁殖や遺伝といった、地球の自然が持つ多様なシステムをうまく利用しているわけです。そしてこれらのシステムは、地球誕生以来の歴史の中で形成されてきたものです。フィールドワークを通じた、農の営みの基盤としての地球システムの読み解きについて考								
Continue to 自然と文化 - 農の営みを軸に - (2)								

えます。

第二部 水田と森が育む文化

4) 里山の環境利用 (小坂康之)

日本では現在、木材伐採、薪炭材や刈敷きの採集、狩猟などによる森林資源利用が少なくなりました。その結果、かつて里山を覆っていたコナラやアカマツの明るい疎林は、シイやカシがうっそうと茂る照葉樹林になりました。シカやイノシシなどの野生動物が増え、農作物や森林植物の食害が問題化しています。一方で東南アジアの里山では、資源の過剰採集による森林の劣化が指摘されています。日本と東南アジアの里山を比較しながら、人と自然の付き合いかたを考えます。

5) アジアの水田稲作と「緑の革命」 (小坂康之)

アジアでは各地に水田がみられますが、稲作技術は地域ごとに異なっていました。それは、地形や土壌、気温、降水量など、地域の自然環境に適した細やかな技術が培われ、長年にわたって受け継がれてきたからです。しかし、「緑の革命」と呼ばれる農業の近代化の過程で、環境負荷の小さい細やかな技術が失われてきました。農業生産と環境保全を両立させることは可能なのか、アジアの様々な水田稲作を紹介しながら考えます。

6) 「常緑の革命」としてのアグロフォレストリー (竹田晋也)

アグロフォレストリーとは、農作物や家畜との組み合わせで樹木を育てる土地利用システム・技術の総称で、人類が古くからおこなってきたごく身近な土地利用の方法を新しい用語でよびかえたものです。樹木・農作物・家畜を組み合わせることで、森林の機能を活かしつつ、土地生産性を高めていく方法として注目されてきました。日本・東南アジア各地のアグロフォレストリーを紹介してそのシステムの成立要因を探り、さらに「緑の革命」の及ばない限界地での「常緑の革命」の可能性について考えます。

7) 非木材林産物と資源管理 (竹田晋也)

近年では木材のみが森林の産物と見られがちですが、工業化が進展するまでは、森林は多種多様な非木材林産物の源泉でした。とりわけ東南アジアでは、非木材林産物の商品生産により熱帯林が持続的に利用されてきた例が多く見られます。「樹脂」生産の事例紹介を通じて、非木材林産物が森林資源の維持・再生に果たしてきた役割を探ります。

第三部 山と海の生態智

8) 照葉樹林文化 (柳澤雅之)

ヒマラヤ山脈中腹から西日本にかけての地域には、カシやシイ、ツバキ等、葉に光沢のある樹木が卓越する植生がかつては卓越し、これらと同じ地域に、水さらしによるアク抜きや漆の利用、モチ、お茶、味噌・納豆、シルク生産といったさまざまな物質文化と、洪水神話や羽衣伝説といった精神文化の両方で共通の文化要素が見て取れます。これを照葉樹林文化と呼びます。照葉樹林文化を紹介しながら、自然と文化について考えると同時に、フィールドワークに基づいた京都大学の知の伝統について考えます。

9) ヒマラヤの暮らしの変容 (小坂康之)

東ヒマラヤは地形が険しく、疾病が猖獗を極め、20世紀半ばまで外部者の立ち入りを阻んできました。その後、インドと中国の国境係争地になると、インドによる実効支配確立のため、文化の異なる人々の同化政策が進められました。その過程で、地域固有の言語は共用語へ、焼畑耕作は水田耕作へ、雑穀食は米食へと転換されつつあります。ヒマラヤの暮らしの変容をテーマに、自然、文化、政治など、さまざまな問題を考えます。

10) 熱帯島嶼部の暮らしと環境問題 (古澤拓郎)

島嶼部という限られた面積、閉じられた生態系の中で、人間はどのように暮らしてきたのか、をテーマにします。太平洋の島々には、森林被覆率が非常に高いものがあります。ただしその中には、人間が生きていくことができるように、生産性が高い人工の森林にすべて置き換えてきたものもあります。この一方で、現在では気候変動による異常気象や、海面上昇に直面している社会もありま

す。島嶼特有の適応戦略と現代の課題について考えます。

11) 自然知としての暦と生業 (古澤拓郎)

農耕・狩猟・漁撈といった生業社会では、環境から安定して食料を得られるように、そして干ばつ・洪水・地震津波といった災害に備えて被害を抑えるために、自然についての知識を蓄積してきました。そのような民族(民俗)科学は、西洋科学とは異なりますが、実用的で高度なものです。生態系についての知識である民族生態学と、季節変化を予測する知識としての在来暦を中心に取り上げ、自然認識・自然利用と在来地の災害レジリエンスについて見ていきます。

第四部 農と食の多様性の未来

12) アジアの市場から地産地消を考える (小坂康之)

現在、日本のスーパーマーケットで販売される食料品の多くは、遠い外国から運ばれてきたものです。一方で、食料自給率の低下に対する懸念や、食の安全性に対する関心の高まりから、地域で生産された食料を地域で消費する「地産地消」の取り組みが注目されています。そこで、アジアの市場に並ぶ産物や農村の暮らしを紹介しながら、地産地消について考えます。

13) アジアの食文化グローバル化 (古澤拓郎)

20世紀には、いずれ世界の人口が増加して、食料危機が起こるという予測もありましたが、これは欧米人の食生活に基づいたものでした。しかし実際に爆発的に人口が増加してきているのはアジアであり、そこには固有の食文化があります。東・東南アジアで好まれる豚肉や魚介類、イスラム教徒やヒンドゥー教徒の鶏肉食・菜食主義は、欧米の牛肉嗜好よりも必要な飼料が少なく、一人当たりに必要な農地も少ないため、食料危機が起こる見通しは少なくなっています。ただ、アジアでも食の欧米化というグローバル化が進んでいます。そこでアジアの食生活が欧米化する問題を検討するとともに、アジアの食文化の可能性を科学的データから考えます。

14) 農業と農村の将来 (柳澤雅之)

2007年、人類史上初めて、都市人口が農村人口を上回りました。豊かな文化を育んできた母体である農村社会は、現在、激しい変容のもとにあります。日本と東南アジアの農村の変化を比べながら、将来の、農業・農村の役割や人と自然の関係について考えます。

【期末試験】：各担当教員が1題ずつ出題する問題の中から2つを選び、論述形式で回答する試験を実施します。

15) フィードバック

[Course requirements]

None

[Evaluation methods and policy]

毎回の講義の最後に出席確認を兼ねたアンケート調査を実施する(評価には含めない)。授業参加度40点、期末試験60点で成績を判定する。

[Textbooks]

Not used

[References, etc.]

(References, etc.)

Introduced during class

自然と文化 - 農の営みを軸に - (4)

[Study outside of class (preparation and review)]

講義の中で文献・図書を紹介するので、自学自習に役立ててほしい。

[Other information (office hours, etc.)]

農学を志す学生だけでなく、広く人と自然の関わりや農林業に関心をもつ学生を対象とする。これまでも文科系学生が多数受講しており、理科系・文科系相方の学生の受講を期待する。